

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2018年度第1回研究会の報告

日時：2018年4月20日（金）18時30分から20時15分
会場：戸山キャンパス33号館16階、第10会議室

このたびの「想像力」研究2018年度第1回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む約10名の参加者を得た。今回は、森由利亜教授（本学）が以下の題目で話題提供を行った。

「老荘思想における「想像力」—生きた象を思い描く力」

〈梗概〉

西洋由来の術語の翻訳語が日本語話者である私たちの思考を陰から規制することは十分あり得る。私たちがある言葉を使って思考している際に、それがどのような暗黙の文脈によって規制され得るかを意識化することは重要な作業のように思われる。そのためには翻訳に用いられた私たちの言葉の由来について思いをはせる必要がある。この報告では、私たちが現代日本語で用いている「想像」という語が、どのような思想表現上の行為のパターンを担い得るかについての一類型を示すために、日本の文化にとっても古典的な伝統に位置づけ得るはずの老荘思想における用例を中心に考察した。「想像」もしくはその同義語である「想象」という語は中国の学術史において、特段の地位を与えられてきた形跡はないように思われる。事情は老荘思想文献においても同様であり、用例自体極端に少ないが、ただ『韓非子』解老篇に、『老子』のなかの「無物之象」という句を「想象」という語に関連させて解説する有名な一段がある。感知の対象としてのあらわれをもたない「道」（万物の存在の根源）を、聖人はその痕跡を洞察することを通じて把握することができるとし、この把握の過程があたかも中国にはめずらしい象（ゾウ）という動物のすがたについて、死んだ象の骨の図からそれをおもいえなく、すなわち「想象」する過程と同様であると説明されるのである。さらに『列子』湯問篇では、いわゆる「知音」の故事で知られる説話が提示され、琴の名手である伯牙の心を、鍾子期が伯牙が弾く琴の音を通じておもいえなくことを「想象」の語によって表現している。つまり、現象として表れた限られた知の領域をもとに、本来感知できないはずの無知の領域をおしはかることが「想象」と表現されているが、このような知と無知の関係は『莊子』のなかでさかんに表現されているものである。つまり、「想象」という語こそ使われていないが、それに相当する状況は『莊子』における中心的なテーマに関連するといえる。本報告では、老荘思想における「想像」の現場を『莊子』の知／不知論に求め、知・不知およびその分断を超えるものとしての道と身体（修行）の相互関連を論じたのである。（森先生記）

次回の研究会は、6月末までのあいだで、可能な限り多くの参加者を得られる時間を探し、開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）